以上で論稿三十三篇、教室卒業生の約半數の寄稿を網羅し、それが卒業順に配列されてゐるから讀者は又本書によつて當教室の學風並にその志向を觀取されるであらう。（菊版八六八頁、定價拾圓特價九圓、古今書院發行）〔米倉〕

○考古學年報

東京考古學會編

本書は昭和九年度に於ける本邦考古學界の業蹟を整理し、此の方面に關心を持つ人士の便宜に資せんが爲に編輯したものである其の内容は先づ考古學文獻の總目をばA考古學一般・理論文獻、B日本内地考古學文獻、C同歴史考古學文獻、D日本内地以外考古學文獻の四項に分かつて列擧し、これに地域別索引と筆者別索引とを附し、次ぎにその内主要なる論著の梗概及び批評を掲げ、更に同年度に於ける本邦考古學界の動向を說き、猶卷末には附錄として英文の學界展望を載せて居る。誠に適宜と稱すべき年報であつて、文獻の點に於ては殆ど遺憾なしと思はれる程度まで網羅され、主要論著の紹介批評、學界展望なども簡にして要をつくして居る。かゝる年報はそれ自體の價値もさることながら、これを繼續することに依つて更に使命を發揮するであらう。されば編者の勞を多とすると共にこれが繼續を祈つて止まぬ。猶終りに注文として可及的に圖錄轉載の興富を望む次第である。大阪市住吉區阿部野筋三ノ十、東京考古學界發行、定價壹圓四拾錢〔小野〕

彙報

○京都帝國大學文學部國史科學生紀和地方見學旅行記

第一日（五月二十三日）日前神宮、國懸神宮、伊太祁曾神社、籠山神社、東照宮、紀三井寺、

此日前夜の雨模樣は打つて變つた快晴となり、前途の萬幸を約する樣である。午前七時には藤・出雲路・柴田三先生を始め卒業生・學生の京都驛頭に集る者二十數名、途中大阪から參加もあり、九時半阪和東和歌山驛に降り立つ者丁度三十名となつた。

日前神宮、國懸神宮、驛より東へ步行數町鳥居をくゞれば、眞直に北に連る參道を軸として、左に日前大神を祭る日前宮、右に國懸大神を奉祀する國懸宮があり、一は日像鏡他は日矛を御靈代とすると傳へてゐる。日像鏡及日矛に關する神話は更に說く迄もないが、由來此の兩大神は卽ち天照大神の權委とせられ、朝家の御崇敬極めて厚かつたことは天武平城文德淸和の歴朝、幣帛、神封或は神寶を奉獻されたことが史に見え、又延喜式には、名神大社に列し、新年月次新嘗の諸祭及び特に相嘗の祭にも官幣に預つてゐる例によつても察せられる。更に此の御神と此の紀の土地との關係には、天道根命を始祖とする紀國造家が連綿として此の神の司祭奉祀に當り今に及んでゐる地緣血緣的な永い深い繫りがあり近くは德川頼宣が初めて紀伊に入國するや、先づ此の兩宮の社殿

を再建し奉つたごとき最も由緒ある社である。社司に案内せられて、初に日前次で國懸に參拜、社殿の構造に就て出雲路先生の懇切な御說明を拜聽する。兩宮共社殿の構造は全く同じであるが、共に綠樹繁り幽邃境に、鎭ります簡素古朴な御社の森嚴さには自ら襟を正す。社務所に於て古文書類を見せて頂く。再三の火災、秀吉の太田城水攻の事などにより、大半は喪失したとの由であるが、「文永二年十月、燈油證文之案」「建武四年五月十三日、和田鄕田福寺燈油畠之事」「長享元年十二月、御神事之切帳」「明應七年三月、田地證文案」等經濟關係のものを初め、「文明十二年俊連公自筆、御遷宮記」「元龜三年五月、近年當宮御炎上之事」「元和九年四月、鎭座御緣起」等、神社の沿革緣起に關するもの、以前恒例の行事として流鏑馬が行はれてゐた爲、「流鏑馬之記」(文安、天文、永祿、元龜、天正等の年號見ゆ)や正德五年乙未八月、「流鏑馬儀式」等が殘つてゐる。中に「釜山神主補任案」なる一通の文書があり、その文言には「釜山神主事、右鵜飼氏代五番神主新五郎給處也、進上料足伍百文、仍爲後日狀如件」とあり、永德元年七月二十五日の日附がある。これは當社と籠山神社との關係の一端を示す興味ある史料たると共に、往時紀伊國一圓に當社が有した支配的勢力をも窺ふに足るものである。披見を許された文書類は他になほ多くがあつたが、前途を急ぐ關係上精しく見るを得ず、遺憾乍ら他日に割愛するの他なかつた。

伊太祁曾神社　五十猛命を祀り、社格は官幣中社である。和歌山鐵道山東驛に下車、南へ三四町、山を背にした本殿はさゝやかであるが、神寂び蒼蒼いた觀がある。拜殿は十一間三面の幅廣きもの傾斜を利用して建てられ、中央の廣い間は階段の通路となり樓門の樣な外見をもつ珍らしい建物である。二ノ鳥居の直ぐ内には瑞橋と云ふ反橋が四角な池に架せられて賀茂の社を聯想さす構も目を惹く。參拜を終り社務所に於て晝食を濟して後、一同卓を圍んで文書類を見せて頂く。承安二年正平七年明應元年及包紙に弘安とあるものなど四通の輪旨、延元二年の沙汰書二通(以上寫)、江戸中期以後當社禰宜矢野赤松兩氏に對する吉田家の裁許狀四通などがある。神社に關する記錄としては「日本國伊太祁曾大明神御緣起之事」一卷「伊太祁曾神社概由」「伊太祁曾神社緣起由緒書」「伊太祁曾宮年中行事」「伊太祁曾社略來歷並年中行事」等の假綴册子本等である。尙、別室には最近境内から出土の祝部土器數個が列べてあつた。

歸途境内の一古墳に立寄る。高いドーム狀をなした玄室は廣さ六疊敷程はあらう。頭上には板石が丁度天井の樣に渡されて、その隙間を通して手際よく積まれた石壁が高く美しい弧線を現はしてゐるのが見られる。

籠山神社　籠山驛には清水學士が一行を待ち東道の勞を執られた驛より南へ八九町、大きい圓塚が彥五瀨命の鎭り坐す籠山陵であり、神社は此の陵墓奉拜に起つたもので、官幣大社に列せられてゐる。斯かる山陵を奉祀の對象とする社は河内の譽田八幡越後の彌彥神社と共に珍らしいものと云ふ。社殿は造替後間もなく木香あたらしく、莊重な感じを抱かせる。靜かに神社に額き古陵の松

聲に耳を澄ます時、宣長が「男建の神世の御聲おもほへて荒風はきしき寵山の松」と詠じた感慨は實である。

此處に於て披見した文書中には、天文年中の「釜山明神之地帳」なるもの最も古く、「舊記燒失目錄」(天正十四年五月、神主鵜飼吉政、花押)に「勾魂壺二、毎年三月櫻ノ神事ニ山陵ト共ニ此壺ヲモ祭候」とあるのは注意すべく寛文五年三月鵜飼吉正の「年中行事舊記」にも三月十三日には花鎭神事を行ふことが見え、今は廢絶した異色ある神事の存在を物語つてゐる。

東照宮、再び和歌山市に歸り、市電で東照宮へと急ぐ途中、折良く後れて來られた西田先生とお遇ひする事を得。南紀東照宮の高い石段を疲れた足を曳きつゝ昇る。少憩すること暫時、華麗を極めた社殿を拜觀する。紀伊德川家創基の頼宣が家康を祀り建立せる處として、近世初頭特有の廟建築の代表的なものに數へ得るであらう。本殿石ノ間拜殿を結合した所謂權現造又唐門瑞垣を通じて得る印象は、唯「華麗」の二字に表して十分である。鮮麗な障壁彩畫、精緻な浮彫、濃厚な綯爛彩色を以て隙なく埋め盡した建物は、まことに近世文化の一傾向を代表するものである。就中拜殿向拜の天女、石ノ間欄干の鯉の浮彫は左甚五郎の作と傳へられその巧緻に暫し驚異の目を瞠る。尚ほ當社の文書類は殆んど軸物として祕藏せられ、家康筆短册を初め、南龍院頼宣の下知狀、黑印宛行狀、命名書、其他の書狀等數通、他に頼宣筆の詩句七絶、布袋鷄の墨繪など彼の多能多才を窺ふに足るもの、當社に取つては貴重の社寶である。

東照宮を辭した我々は旅宿あしべ屋に携帶品等を預け紀三井寺に向ふ。此處で出雲路先生は歸京され淸水氏また歸京され。

紀三井寺、此處でも亦高い石段を登らねばならぬ。櫻門は國寶に指定されてゐるもの、天正十六年の建立とあり、本堂は寶曆年間の建築であるが、國寶多寶塔と爲光上人像を安置する開山堂(共に室町末期のものとされてゐる)との調和も、夕陽に映えて一入美しい。佛像を拜觀の後、書畫、什器類の陳列を見學した中に、當寺へ宛てた慶長六年十二月六日附淺野幸長折紙寄進狀、方常上人筆紀三井寺緣起、傳小野篁筆絹本地藏菩薩像(鎌倉末乃至足利初期のものと推定されるもの)等が印象に殘るものである。(堀內)

第二日、和歌山城、粉河寺、槃山寺、宇智川磨崖碑、櫻井寺

早朝起床。快晴、宿の二階から和歌浦の風光は一望の內に收められ入江をへだてゝ山の中腹に紀三井寺の堂塔が綠に映えて鮮かに、ほのかに聞ゆる鐘の音は朝の勤行を知らするものであらうか。出發までの時間を三々五々に打群れて和歌浦の名勝を尋ぬれば、さゝやかな祠ながら鹽籠神社も玉津島神社も宿に程近い。

和歌山城　八時出發。和歌山市驛に至る電車の途中乘換場所を幸に和歌山城へ。時間が少く慌しい見學であつたが流石に天主閣の頂上に登れば眺望は廣く、遠く封建領主の感慨を偲ばせるものがある。この城(天正十三年羽柴美濃守秀長の築城に係り、元和五年八月藩祖德川頼宣此の地に封ぜられてより、更に要害を堅固にし規模を擴張して大に闢修の工を起させたが、惜しい哉その後火

災で當時のもの多く燒亡して今殘る天主閣は嘉永年中竣工したものである。然し乍ら舊型を踏襲してゐるから昔日の偉觀を偲ぶには充分であらう。

粉河寺　和歌山市驛から中村先生も加はられ、午前九時六分發。青田の中を突走る事四十五分、今日の第一の目的地粉河寺驛に到着した。驛から北に約十町許り、門前に軒を連ねた町を縫うて、輕い汗を拭き乍ら山門をくゞる。こゝは天台宗延曆寺末、日光山門跡の支配に屬する西國第三番の札所である。緣起によれば寶龜元年大伴孔子古の草創する處といひ、その傳說は寺藏の國寶粉河寺緣起に詳細に傳へられてゐる。歷史をたどればその後歷代皇室の崇敬最も厚く、攝關家の信仰も亦深く紀伊屈指の名刹としてその位置は頗る重要なものがあつたと思はれる。吉野朝時代に於ける當時の活動は本日拜觀を得た數々の古文書の語る處によつて明白であるが、元弘三年護良親王令旨を四方に下して勤王軍を募らゝや當寺行人等もその傘下に馳せ參じた盛時を偲ばしむるものがある。その後足利氏はよく本寺を崇敬し義持義教等の參詣もあつて寺勢頓に振うたが、天正十三年豐臣秀吉に抗したため燒討を蒙り、一山悉く燒土と化し寺領も沒收さるゝの悲運に遭ひ、可惜綸旨院宣の文書舊記皆散亂燒失し今傳ふるは僅に十分の一に過ぎずといふ。その後慶長中淺野氏寺領四十六石餘を寄せ寺院を興隆し、德川賴宣和歌山に封ぜらるゝや又寺領を寄せ漸く舊態の幾分を復して今日に至つた。

本堂に參つて、粉河寺緣起に童男の作と傳ふる本尊千手觀世音の尊像を拜し、堂內の諸佛を詳さに見學して、別堂で什寶を拜觀する。待望の國寶粉河寺緣起繪卷一卷、幾度の火災をくぐり、卷頭は既に燒失してなく現存の部分の天地に傷ましき燒痕を殘してゐる。この緣起は草創より壽永までの靈驗十三ヶ條を書したもので、普通の緣起と例を異にして古書に徵する事多く描法は最も信貴山緣起と類似するといふ。見るからに筆勢輕妙にして動的效果を擧げ、內容と形式よく相協ひ、構圖の選擇、物象の造形法等總てに意を用ひられ物語の展開も妙を極めてゐる。無限の妙味の脈動に私達は全く我を忘れるのであつた。

綸旨、令旨等十七通を收める一卷の古文書は波濤重疊の吉野朝時代における當寺の活動を示す貴重なる史料である。粉河寺行人等の勤王は元弘三年正月十日及同年十二月二十日の大塔宮令旨によつて知られ、(延元元年)十二月二十日卯刻綸旨は吉野臨幸の後醍醐天皇を奉迎し供養申上ぐべき旨粉河寺行人等に傳へたものであり、建武三年十月二日及七日の粉河寺方衆に宛てた源國清(畠山)の書狀は新田義貞並に楠正成興黨之輩を誅伐するに當り、將軍家の爲に彌軍忠を致さるれば恩賞を申行ふべきを執達したものである。こゝに南北兩朝と粉河寺行人及方衆との關係の一端を窺はしめ、興味油然と興つて盡くるを知らない。

その外正曆二年十一月二十八日の太政官符寫一卷、元曆二年及永仁六年中に起つた寺領訴訟問題に關する古文書寫一卷がある。尙同時に見學して御池坊舊藏のものに足利時代末と思はれる二見文書の新寫一卷や、慶長の頃と推定される粉河寺御池坊舊記等が

あつて特に注目すべきものであらう。

氣付かぬうちに興味がのると時の移りも早く、正午になつた。晝食を濟ませて、深き感銘を懷きつゝ出發。○時五十分粉河驛發の列車で五條に向ふ。

榮山寺　一時四十分五條驛着、バスを利用して榮山寺へ。驛から東南へ半里許りもあらうか。寺は豫期したより荒廢してゐた。その昔養老三年藤原武智麿の建立以來藤原氏の氏寺として、累代厚き崇敬を受け、多くの寺領を所有して吉野金峯山紀伊高野山と爭うた過去をもち乍ら、今僅に金堂、八角圓堂、求聞持堂の二三宇を止むるに過ぎず、夏草の繁るに任す姿を見れば轉た今昔の感に堪えないものがある。堂の住持留守のため國寶も數點ある古文書の披見の樂しい期待も空しく、唯八角圓堂を開いて頂く。堂は唯一つ草創當時の面影を偲ばしむる遺構法隆寺の夢殿と併び稱せらるゝ圓堂建築であり、構造法の新機軸、小規模の中にも見せる意匠に變化等特色がある。が近年の大修理を經た爲か古雅な味ひは失はれてゐる。本尊としてはさゝやかな大日如來を安置し外にも數點國寶佛像が並べられてゐる。その外境内の七重石塔婆も天平時代のもので造立當初の相輪を具備して居り、珍しき例として注目せられ、藥師堂前の石燈籠も秩戸形の優作で高さ三尺、竿に磨滅甚しく讀み難い刻銘があり漸くに「榮山寺」「弘安七甲申」「勸進良受」と判讀出來、火袋二ヶ所にも梵字が陰刻されてある。鐘樓に懸る銅鐘は日本三鐘の一として有名なもの、もと深草道澄寺の什物高さ五尺口徑三尺鐘身に鑄出された銘文は小野道風筆と傳ふる。正しく延喜年中の大筆蹟である。

宇智川磨崖碑、歸途宇智川橋下溪流の左岸の岩壁なる磨崖碑を見學する。約二米平方の磨崖に涅槃經四句の偈文を刻し傍に佛像一軀が彫られ、寶龜九年二月四日の紀銘が明かに讀みとられる。時間の餘裕のあるまゝに溪流に戯れてしばし疲れを醫やし、停車場へ向ふ。櫻井寺發車までの時間を利用して日程にはのらぬ天誅組史蹟櫻井寺を訪れる。天誅組の面々が立籠り反旗を擧げた處で今も尙五條代官の首級を洗うた手水鉢や、本堂柱に槍の鐓を突いて氣勢を擧げた痕など、當時を物語るものがある。時間も迫つたので一同匆々として引揚げ力走漸くに四時の汽車に間に合ひ、一路玉寺を經て奈良に向つた。六時到着、驛で西田先生より御挨拶があつて一同元氣よく解散。初夏の夕陽は赤々と奈良の古京を美しく染め、二日間にわたる旅行の最後の幕を閉すには誠にふさはしき情景であつた。斯く收穫多かりし旅行記の終りに、日程作成其他につき種々斡旋せられた淸水先輩及び貴重なる圖書文書等の拜觀を許された社寺に深甚の感謝を捧げる。〔林屋〕

○史學研究會

例會　六月二十日(土)午後一時半より文學部陳列館第一教室に於て左の講演あり、四時半頃閉會。

一、美術史學の立場　井島　勉氏
（本號所載論文參照）

一、室町時代に於ける丹波、但馬地方　魚澄惣五郎氏

○國史學會大會

本會恒例の春期大會は、六月十三日午後一時より、樂友會館大ホールに於て、西堀、武藤兩幹事司會の下に開催され、來會する者約百名、左記の如き講演及研究發表があつた。

一、開　會　の　辭　　西堀　一三君
一、文化史と民間傳承　　勝谷　透君
一、明治前期に於ける「論爭」の意義　　高瀨　重雄君
一、修驗道と古代呪術　　福尾猛市郎君
一、倭名類聚抄に就いて　　池田　源太君
一、精神史と民俗學　　柴田　實君
一、武士道の一考察　　西田直二郎君
一、閉　會　辭　　武藤　誠君

右終了後、七時より同館第六號室に於て、有志會員の懇談會を催し、西田教授以下會者約二十名、晩餐を共にして歡談數刻に及び十時過ぎ散會した。

○西洋史讀書會

例會。本年度第二回例會は六月二十五日午後六時より、千代田講師歡迎會と村田前講師渡歐送別會を兼ねて樂友會館に於て開催一同會食後新舊兩講師より御所感、御挨拶あり。尚當日講演者病氣の爲、研究室の近況について談話あり、午後九時頃散會。出席者時野谷教授、千代田、井上兩講師を初め二十五名。

○東洋史談話會

第五十一回例會　七月四日午後六時・學生集會所

安史の亂の社會史的考察　　原田　清氏
一唐代の禁令に就いて　　小野勝　年氏

○京都市國大學夏期講演會

去八月一日より六日迄毎年恒例の通り開催せられた本學夏期講演會の中史學關係の講演は左の通りであつた。

滿洲及蒙古　　教授　羽田　亨氏
科外講演
波斯風景(幻燈使用)　　講師　足利・淳氏氏

會報

○寄贈交換圖書目錄

朝鮮史　三ノ六、七、四ノ三、四、六、七、五ノ五、六、七、六ノ二　朝鮮總督府朝鮮史編修會
朝鮮史料叢刊　上　十、十二　同
史料叢刊　同
田所眉東著　阿波新田氏　德島、藤村九平氏

史學雜誌	四七ノ七、八、九	東大史學會	天理圖書館
歷史地理	六八ノ一、二、三	日本歷史地理學會	京大東洋史研究會
社會經濟史學	六ノ二、三、四、五	社會經濟史學會	日本大學文學科
史苑	十ノ二	立教大學史學會	長崎史談會
史潮	六ノ二	大塚史學會	國立北平圖書館
人類學雜誌	五一ノ六、七、八、九	東京人類學會	
考古學雜誌	二六ノ六、七、八、九	東京考古學會	
文化	三ノ六、七、八、九	東北帝大文科會	
國學院雜誌	四二ノ七、八、九	國學院大學	
史迹と美術	七ノ八、九、十	史迹美術同攷會	
經濟論叢	四三ノ一、二、三	京大經濟學會	
社會學徒	十ノ七、八、九	社會學徒社	
鄉土研究	五ノ六、七、八、九	信濃鄉土研究會	
信濃史學	十五ノ二	三田史學會	
龍谷史壇	十八	龍大史學研究室	
史淵	十三	九大史學會	
臺大文學	一ノ三、四	臺大短歌會	
南方土俗	四ノ一	南方土俗學會	
國民精神文化	二ノ一	國民精神文化研究所	
宗學研究	十二	宗學研究會	
民族學研究	二ノ三	日本民族學會	
以可留我	一ノ一	鵤故鄉舍	
西洋史研究	九	東北帝大西洋史研究會	
皇學	四ノ二	神宮皇學館々友會	
日本文化	七		
東洋史研究	一ノ一—六		
史學研究年報			
長崎談叢	十八		
國立北平圖書館々報	九ノ五、六		
Nankai Social & Economic Quatorly	九ノ一		
Harvard Journal of Asiatic Studies	一ノ一		

○會員動靜

轉居

神戸市神戸區元町一丁目三三	香川貞三氏
東京市牛込區市ヶ谷臺町四	甘蔗普濟氏
京都市伏見區醍醐中山町一五	猪熊信男氏
京都市上京區下鴨膳部町九一	平山繁次郎氏
京都市上京區小山堀池町二九	谷岡安三郎氏
東京市目黑區自由ヶ丘八〇	森下眞男氏
京都市左京區北白川平井町八四	井上智勇氏
京都市左京區田中里ノ內町一〇	秋貞實造氏
京都市左京區吉田本町五 平野方	酒見豐氏